

(様式)

令和5年度 学校評価書

学校名： 静岡市立清水江尻小学校

大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から (小中一貫教育準備委員会等)	改善策(来年度の目標設定,具体的な取組目標)
【視点1】 学校の教育目標を グループ校で共有する	グループ校共通学校教育目標	① (独自)「自分で考えて行動できる」と考える児童生徒の割合を70%以上にする。 (学校説明)(学校説明)3校で、「自分で考え行動できている」と自覚している子どもが86%であることから、目標は達成できたと判断する。86%の保護者も肯定的に評価している。反面教職員の肯定的な評価が60%に留まっていることから、さらなる成長を期待する。	A	・全体的に、アンケートの結果が、職員と児童生徒の回答内容に差が大きい項目が多い。アンケートをとる際に、生徒児童へ補足説明をしてはどうか。また、親の我が子への期待が大きいように、先生方の生徒児童への期待が大きいのは当然のことであるので、それをわかっていればこのままでよいのではないかと。	指標①② 本年度の評価指標に示した目標は適切であり、十分な評価をいただいたことから、両評価指標を継続する。 ①の指標については、生徒と教職員の見取りに差が生じている現状から、評価基準について、見直しを進める。自立心、自己有用感の伸長を目指し、より効果的な教育課程を編成し、教育活動を推進する。
	自ら考え行動する子	② (独自)「自分以外の役に立っていると思う」児童生徒の割合を75%以上にする。 (学校説明)3校で、「人の役に立っていると自覚している子どもが84%以上になっていることから、目標が達成できたと判断する。保護者の87%、教職員の80%が肯定的に評価していることから、子どもの自己有用感を着実に醸成されている。			
【視点2】 9年間の系統性、連続性を 強化した教育課程を 編成・実施する	グループ校の軸となる取組	自分で解決する力の育成	③ (独自)「学年段階に応じた聴き方・話し方ができていると思う」児童生徒の割合を80%以上にする。 (学校説明)児童生徒の肯定的な意見の割合は80%を超えており、目標が達成できた。学習の心得5項目と共に、各学年の話す聴くを目指す姿を3校で共有して取り組んできたことで、良い聴き方・話し方が身に付いてきている児童生徒が増えた。ただ、「とてもそう思う」の割合がまだ50%に満たない。また、教職員、児童生徒との結果が乖離している点に課題を感じる。	A	指標③児童生徒が、「わからない」など自分の意思を表示できることを3校共通で指導をしていく。その手段として、辻小、江尻小はハンドサイン、一中は3色の紙コップを活用する。また、授業公開などでその様子をお互いに見合うことで、9年間を通して自分の考えや思いを表現できる力の育成につなげていきたい。
		人を思いやる力の育成	④ (独自)「学年段階に応じた言葉遣いができていると思う」児童生徒の割合を80%以上にする。 (学校説明)3校のアンケート結果の平均値が82%となり80%を超えた。「いい言葉の日」やソーシャルスキルトレーニングなどへの取組、年度当初に言葉に関する授業を3校で行う取組などを通して、子どもたちの言葉に対する意識が高まってきている。ラストステージの「いい言葉の樹」の取り組みも思いやる力の育成の具体的な手立てとなってきた。	A	
		人とつながる力の育成	⑤ (独自)「自ら進んであいさつができていると思う」児童生徒の割合を80%以上にする。 (学校説明)挨拶交流活動は、月2回程度実施でき、生徒アンケートでは3校平均において、「自ら進んで挨拶する」の項目でA46%、B37%であり、合計が80%以上であった。小中高によるあいさつ交流活動が効果的であった。	A	
【視点3】 教職員の協働、児童 生徒の交流	児童生徒の交流	⑥ (独自)「児童生徒会の活動を軸として、児童・生徒の交流が進められていると思う」児童生徒の割合を70%以上にする。 (学校説明)前後期1回ずつの児童生徒会交流を行うことができ、挨拶交流に加えて、小学生と中学生が共通の話題を通して話し合いをする機会を設けた。生徒アンケートでは、3校の平均がA35%、B46%が「児童生徒会の交流が進められている」と答え、80%以上が肯定的であった。	A	指標④目標である80%はA「とてもそう思う」B「ややそう思う」の合計なので、次年度は、Aの評価の割合を増やすように、今年度同様学活や道徳、ソーシャルスキルトレーニング等を充実させ、言葉に対する意識を高めていく。 3年目になる「いい言葉の樹」も感謝の気持ちを多くの人にもてるよう、道徳などの授業を通し気づきを促していく。 指標⑤次年度は、3校全てで、「A+B」が80%以上を達成を目指していく。具体的な取組としては、「毎月の挨拶交流」「前後期1回ずつの3校合同挨拶交流の日」を行っていく。また、清水国際高校、清水東高校との高校生との挨拶交流も継続させて、挨拶に関する活動を充実させる。	
	授業研究交流・情報交換	⑦ (独自)「一中グループの日等を活用し、授業や活動についての共通理解を図れた」と考える教職員の割合を75%以上にする。 (学校説明) 肯定的な意見が、3校平均で71%であった。目標を4%下回ったため評価をCとした。小小連携において、児童が交流する活動によって、大変よい刺激となり、児童の様子活性化に繋がった。一方で、「一中グループの日」の設定理由や目標の共通理解が図られなかったことが課題と考えられる。	C		
【視点4】 地域との連携	コミュニティスクールの充実	⑧ (独自)「小中一貫コミュニティ・スクール化により、学校・家庭・地域の協働体制が整えられてきていると思う」保護者・教職員の割合を70%以上にする。 (学校説明) 学校・家庭・地域の協力体制が整えられていると考えている教職員の割合が78%、保護者が85%であった。職員、保護者ともに学校支援部会、学校運営協議会を通して、学校教育に参画している意識が高まっている。本年度は、防災教育に力を入れ、子どもが地域の自主防災会会長の講話を聞いたり、地区の防災施設について話を聞いたりするなど地域との結びつきが深まった。	A	指標⑥次年度は、3校全て「A+B」が80%達成することを目指していく。「児童生徒会交流会」として、前後期で1回ずつ「児童会と生徒会の役員が集まって共通の議題を検討する」「挨拶交流以外でも、児童生徒会で交流できる活動」を子どもたち同士で考え、それを具現化できるように支援していく。 指標⑦小小連携の交流や児童生徒会の交流など、子どもたちの変容が感じられる活動が増えるように、各委員長が中心となって、一中グループの日の議題や内容を考えるようにしていく。また、9年間で児童生徒を育てていくという観点から、情報交換がさらに進むように一中グループの日の活動内容を精査していく。	
学校環境	教職員の業務改善	⑨ (独自)「人材(地域学校協働活動推進委員、SSS等)の活用により業務改善が進んだ」と考える教職員を70%以上にする。 (学校説明)人材の活用により業務改善が進んだと考えている教職員の割合が89%であった。地域の人材を活用した学習を進めるにあたり、地域学校協働活動推進員が人材確保やボランティア募集の面で尽力していただき、職員の労力軽減につながっている。また、スクール・サポート・スタッフ(SSS)に文書の印刷や教材の作成等を依頼したことにより、職員が子どもたちと関わる時間が増えてきている。今後も人材の有効な活用方法を模索していく。	A	指標⑧学校・家庭・地域の協力体制が整えられていると考えている保護者の割合が高い反面、教職員の評価が低い。それを改善するために学校支援部会にて、学校教育活動をさらに進めるための話し合いの充実を図る。学校からめざす子ども也像や具体的な活動を地域に発信し、支援してくれる地域の方や保護者との協力体制のさらなる構築に努める。 指標⑨人材の活用や、地域、保護者の協力により、登下校時の安全指導や学習におけるサポートの充実も進んでおり、教職員の負担感は軽減しつつある。ただ、地域学校協働活動推進員と担任職員が直接話をする時間の確保に難しさがある。今後は連絡を密にとり合いながら、さらなる連携強化を図り、より効果的な活用をめざしていく。学校運営協議会において、さらなる業務改善に向けて、地域も協力していくという力強い意見をいただいたことは、職員にとってとても心強く、ありがたい。今後も、学校、保護者、地域が手を取り合い、子どもたちの成長につながる豊かな教育活動を展開していく。	

静岡型小中一貫教育 調に 査 お け る 共 通 と な る 教 育 活 動	学力の状況 (全国学力・学習 状況調査)	小学校	(学校説明) 国語科では、「話すこと・聞くこと」の力が付いている。話し手が伝えたいことを正確に捉える力や、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめる力が付いている。一方で、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表す力に課題が見られた。 算数科では、「数と計算」「データの活用」に関する問題でよい結果が見られ、示された日常生活の場面の中から伴って変わる2つの数量の関係を理解する力が付いている。一方で図形の意味や性質についての理解に関して課題が見られた。	・スマートフォンなどの普及で便利になっている一方で、起承転結を考えた文を書く力が低下していることが心配である。主語をつけない文や、文末に句点をつけない子どももいる。当たり前のことであるが、学校でも丁寧に指導してもらいたい。	改善策(来年度の目標設定、具体的な取組目標) 小中ともに、伝える力に課題がある。小学校では、国語科において自分の考えが伝わるように書き表す力に課題が見られたため、各教科において、自分の考えを書きまとめる場面や効果的に伝える文章表現のあり方について、力を入れて指導し、改善を図っていく。中学校では、国語科で、思考場面で指定されたキーワードを使ったり、時数制限、構成などの条件を設けたりする言語活動を取り入れる。また、説明文や新聞記事などの工夫について学んだり視写したりするなど、規範的な文章を書く機会を設ける。英語科で、AIドリルを積極的に活用することで、基礎基本の定着を図り、ALTとのコミュニケーションすることにより発信する力を高める。 算数、数学でも、小中とも用語を使って説明する力に課題がある。小学校では、算数において、問題を解くことはできるが、なぜそうなるのか、その意味まで理解している児童が少ないため、授業の中で児童に説明させたり、用語を正しく使って考え方を表現させたりする活動を取り入れることで、確実な理解の定着を図っていく。中学校では、各学年で行っている計算練習ノートに授業に復習の計算をするだけでなく、教科書の太字の意味調べを行い、用語を用いて説明できるようにしていく。
	中学校	(学校説明) 国語科では、授業に対する有用感、満足感が高く、ほとんどの問題、領域で全国平均を上回っている。記述式問題の正答率も高く、熟考を要する課題に対しても挑戦する意欲の高まりが認められる。一方、基本的な言葉の使い方は個人差が大きかった。数学科では、各分野とも計算して値を求めることができ、説明・証明問題も解くことができる生徒が多い。一方で、「自然数」「累積度数」などの用語の理解が曖昧なところがある。英語科では、「読むこと」の正答率が高く、静岡県や全国の平均を上回っている。一方で「聞くこと」「書くこと」と「知識・技能」については静岡県や全国の平均を下回っている。			
体力の状況 (新体力テスト、 全国体力・運動 能力、運動習慣 調査)	小学校	(学校説明) 両校ともに、県の平均と比べ、瞬発力と跳躍能力が必要となる立ち幅跳びの成績が良かった。しかし、ボール投げの記録は、男子は静岡県の平均を下回り、女子の記録はわずかに平均を上回った学年があっただけであった。ボールを投げる際の正しい投げ方や体重移動の知識を獲得する場や実践する場の継続指導が十分でないことが要因だと考えられる。また、休み時間にボールを使用して遊ぶ機会が見られないことも現状として挙げられる。	・休み時間にグラウンドでボールで遊ぶ子どもたちが減ってきていることが関係しているのか、子どもたちの体力の低下が気になる。ボール遊びなど外でも遊ぶ機会をつくってはどうか。 ・一中の体育祭を見学したが、生徒が生き生きと種目に取り組んでいる姿を見ることができてよかった。	改善策(来年度の目標設定、具体的な取組目標) 小学校では、低学年のうちから体育の授業や休み時間の遊びの中で、運動の楽しさを感じられる様々な運動遊びをしていく。その中で、いろいろな大きさのボールを投げる体験をし、中学年、高学年と段階を踏むにつれて、回旋や体重移動などのより速くに投げる技能や狙った方向へ投げる正確性を身につけていく。 中学校では、運動の楽しさを実感できる活動の工夫をするとともに、記録を伸ばしたり、成長したりするための忍耐力や挑戦する姿勢をもてるように指導する。そのためには、授業内で、自分の成長が実感できるようにワークシートの活用や中間発表の設定を心がけ、可視化していく。また、賞賛の声掛けを行い、向上心をもって取り組めるように支援する。	
中学校	(学校説明) 男子については全種目で県平均、全国平均ともを上回っている。女子については50m走が県平均、全国平均よりも大きく下回っている。全力を出し切れない生徒が多いと推察する。20mシャトルランでは余力があるのに止めてしまったり、記録を伸ばすための工夫が足りなかったり、忍耐強さや挑戦心に課題がある。 また、実態調査において、「卒業後も運動に取り組みたいか」という質問に対して否定的な回答をした生徒の大半が、「できるようにになったら行いたい」と回答していることから、運動における成功体験の積み重ねの必要性を感じる。				
生徒指導の状況 (学校いじめ防止基本方針)	(学校説明) いじめ対策基本方針に則り、組織として対応してきた。いじめ等を未然に防止するため、各校で子どもの情報共有を心がけている。辻小では、生徒指導連絡会を週に1回行い、職員打ち合わせや年3回の子供を語る会で全職員と情報共有した。江尻小では、特別支援部会を月に2回行い、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、支援員とともに、校内で支援が必要となる児童について話し合う機会を設け、多くの職員が目でも子どもたちを見守った。一中では、教育相談連絡会を週に1回行い、支援が必要な生徒や欠席の続く生徒について、教員間で情報を共有し、対策を話し合った。日常的な生徒の実態把握や情報共有に加え、悩み事アンケート(年3回)、生徒を語る会、夏季研修会も行い、全職員で対応策や手立てを講じながら、組織として取り組んでいる。		・全国的に不登校の児童生徒が増えていることが取り上げられることがあるので、一中学区ではどのくらいの子の割合の児童生徒が不登校となっているのか知りたい。	改善策(来年度の目標設定、具体的な取組目標) 3校ともに、日頃の児童生徒ひとりひとりの理解や、教師間での情報共有がうまく機能しているために、こどもたちは落ち着いた生活が送れている。近年増加傾向にあった不登校児童生徒に対しても、学級担任だけでなく、スクールカウンセラーやSSWなど学校体制で対応するなど、未然防止、早期発見のシステムがより機能するように職員間の連絡を密にしている。昨年度長期欠席の生徒(年間30日以上欠席)が、中学校では、本年度は2%程度減少している。スクールカウンセラー、教育支援員などの支援体制を充実し、ひとりひとりが安心して学校生活を送れるように配慮を続け、子どもの自己実現が叶うように努めていく。	

*教職員の設問で数値が入っている場合の目安：A…数値を大きく上回る(+10%以上) B…数値と同等 C…数値をやや下回る(-10%以内) D…数値を大きく下回る(-10%以上)